ビジネス用語の一考察
——ビジネスとファイナンスの英語——

橋　本　光　憲

目　次

はじめに
1　ビジネス英語とは何か
2　語彙の選定と集約
3　ESP 面からの考察
4　ビジネスの用語
5　最近のビジネス英語辞典
6　橋本編纂の 3 辞典
7　ビジネスとファイナンスの英語
　——ビジネス英語辞典の良否比較——
おわりに

は　じ　め　に

論者はこれまで 2 冊の英和辞典を編纂した。1 冊は『経済英語英和活用辞典』(*A Dictionary of English Usage for Business and Finance*)，1991年で

本稿は，1995年11月 1 日から 4 日まで米国フロリダ州オーランドで開催された The Association for Business Communication（ビジネス・コミュニケーション学会，略称 ABC）第60回年次大会における英文口頭発表 "On Business Language : English for Business and Finance" を敷衍・補充したものである。

あり，1冊は『英和金融用語辞典』(*A Glossary of Financial Terms*)，1995年である。

新たな『英文ビジネスレター文例大辞典』(*A Dictionary of English Business Letter Expressions*)，1995年では，24ジャンルの「分野別専門用語」1,638語を用意した。

ここ数年，英国ではビジネス英語辞典類が次々と刊行されている。*Longman Dictionary of Business English*, 1989に始まり，大冊の *The Oxford Dictionary for the Business World*, 1993，さらには外国人向けの *Oxford Dictionary of Business English for Learners of English*, 1993などと，一斉に出版されているのである。

一方，一般英語（General English）の世界では，言語コーパス（corpus）の蓄積の成果である *Collins COBUILD English Dictionary* の初版（1987年）の用例を全面的に入れ替えた改訂新版（コウビルド英英辞典）が早くも1995年世に出た。

こう見てくると，General English と Business English との境界線ないし境界域はどこにあるのか，そして両者の相違がそれぞれの教授法にどう影響するのかと疑問が湧いてくるところである。

辞書制作者の一人として，論者は用語(words)自身よりもその用法(usage)を重視する立場に立っている。従って，論者が手掛けてきた辞典類では，常に出来るだけ多くの語句（words and phrases）を収容するように努めてきた。そして，実際の用法を示すために完全な文（complete sentences）または節（clauses）の形の用例を多数収録することにしている。

用語集 (glossaries) の場合はページ数の制約上から用語中心とならざるを得ないが，論者の『英和金融用語辞典』では逆引きの和英金融基本用語集を入れて活用の手掛りとしている。

論者の経済英語辞典の対象は，英文名 Business and Finance の通り経済全般であり，一方，金融用語辞典は finance に特化したものである。本稿では論

者の過去10年来の辞典編纂の経験を基に，最近数年の間に刊行されたビジネス英語辞典と論者編の辞典とを比較して，今後の研究・教育に資する点を探ることとしたい。

1　ビジネス英語とは何か（What is Business English?）

日本では，商業英語，ビジネス英語，国際ビジネス・コミュニケーションと，研究の対象をめぐっての論義が多い。そして，商業と英語の二分野を統合する学際的研究としてこれらを位置付けるのが一般的である。さらには，商業の場における言語研究として自己完結した世界を描く傾向がある。

論者は，ビジネス英語を一般英語の延長線上でとらえる立場にあり，商業英語学を独特の世界として祭り上げることには与しない。

ESP（English for Specific Purposes）は「特殊な目的のための英語」という和訳によって矮小化されがちであるが[1]，正しくは「具体的な目的のための英語」と解されるべきであろう。そのESPの立場からは，ビジネス英語（English for Business）は具体的な目的の一つであり，金融，工業，医学等の他の具体的な目的の中のone of themである。

商業という場があって商業英語学があることに異論はないが，それならば同様に金融英語学，工業英語学，医学英語学があって然るべきであり，独り商業英語学のみが神格化される理由はない。

日本の商業英語学を強いて英訳すればThe Interdisciplinary Science of Commerce and Englishとなろうか。論者は寡聞にして英米でこのような研究が行われていることを知らない。それはCommercial Englishないしは Business Englishではないのかという誤解をとくのに苦労することにもなろう。

確かに学問はまず定義付けをすることが重要であるが，定義作りだけに終始していては意味がない。個別研究も結構だが，その意味では対象分野，言

葉は悪いが“縄張り”を固めることが大切である。

論者は以前から商業英語における用語・用例集の必要性を指摘してきた。[2)] 3点の辞典刊行はその実践であるが，最近の2点は1995年刊と新しいためもあってか，未だ学界で正当な評価を受けている感じはしていない。

ABC（ビジネス・コミュニケーション学会）は，1983年に The American Business Communication Association から American の字を落として現名称に変更し，約100名の国際メンバーを含め1,300名の会員を擁する学会である。論者はこの学会で5年連続して発表を行ってきたが，ここでは日本的特殊事情に基づく議論は通用しない。従って，以下の議論では主に英米の文献に依っていることを，予めお断りしておく。

「ビジネス英語とは何か」を考えるために，まず代表的な言語教育資料と思われる Oxford Handbooks for Language Teachers の中の1冊，*Teaching Business English*（1994）[3)] を中心に検証してみよう。

(1) Background

この問題を考える背景として，著者（Mark Ellis & Christine Johnson）は次の2点を指摘する。

* Business English must be seen in the overall context of English for Specific Purposes (ESP).
* Business English implies the definition of a specific language corpus and emphasis on particular kinds of communication in a specific context. (p. 3)

前者の提議は，ESP の重点課題である needs analysis, syllabus design, course design, materials selection and design の点で共通するものであるから当然である。後者の提議も他の ESP 分野と同様の問題である。ただし，それぞれの目的により内容は多少異なってこよう。

(2) Business and General English Courses

次いで，Business English と General English 両コースの比較からのアプローチである。ここで著者は Business English v. General English として興味ある比較をしているが，本論の目的とやや離れるので別の機会に譲り，次の指摘のみを紹介しておく。

* Business English is not a neatly-defined category of special English. The term is used to cover a variety of Englishes, some of which are very specific, and some very general. (p. 10)

Business English といっても対象範囲は広い。日本で中心的な貿易だけでなく，幅広い分野を包含している。ちなみに，前述の *Longman Dictionary of Business English* では，対象とする用語を25分野（業種とは必ずしも一致しないが）に分類しているぐらいである。

もう一つの問題点として述べておかなければならないのは，英米の Business English のテキストといっても，それを鵜呑みにしてはいけないことである。なかには単なる General English のテキストの延長でしかないものもあり，ESP 的な考察が加えられていないものもあるからである。

(3) Job-experienced Learners

ビジネス英語教育の難しさはどこにあるだろうか。実務経験のない大学生にテキストに従って教えることは，さしたる難事ではない。問題は実務経験の相当ある受講者（job-experienced learners）である社会人や勉強中の教師を指導することである。

この点では著者は次のように言っている。

* These business learners use language in order to achieve precise objectives. . . . They will be critical of their own performance, and of the trainer. (p. 17)

ここで実務経験者とは日本人を含めた non-native users of English が主な

対象となろう。指導者に力がなければ授業もできないし，テキストも書けない。実務家サイドの共同作業も必要になる。教師自身がある程度の専門知識を身に付けないと，受講者から相手にされないことになる。

論者自身は金融界出身でゼミナール等で金融英語を講じているが，金融英語に限らず実業界からは大学に対して目的意識を持った専門教育への橋渡しを求め始めている。特に技術系ではその要請が強いようである。

実務経験者対象だけでなく，将来のビジネスマンである大学生に対して，企業側が大学時代でのビジネス英語教育の導入を求めている。専門英語は就職後の企業内訓練に任せておけばいい，という大学側の論理が通用しなくなってきたわけである。

ここに，一般英語からESP（この場合は医学英語）に授業内容を変更した好事例[4]がある。福島県立医科大学の引地岳雄教授は25年間，一般英語を教えた後，時代の変化を感じて1992年に医学英語の教科書を使って講義を行ったところ学生のニーズに目覚める思いがし，翌1993年からは教材を英語医学論文に切り換えたという。

教材は1回45分で約30行，教材研究に2～2.5時間かかったが，学生の関心は高かった由。そして，「文科系の私でもどうにか英語医学論文を読めたと思う」，「扱えそうな論文を2つ探し出すのに3日かかった」との報告を寄せている。

(4) Business English の定義

さて，結論として「ビジネス英語とは何か」ということになるが，この種類の本にありがちなように，What follows is our own understanding of what Business English is...（前述書，p. 7）と言って数ページの記述を加え，具体的な答えを示さない。これでは物の役に立たないので，他書—*English for Business*[5]からその答えを探ってみることとする。この本は英国内の各種資格試験参考書として推奨されている。

同書では，次のように明解に「答え」を出している。

* Business English is the language of the international business world. It is ordinary English, related particularly to business use.
* Fluent business English requires us to have a wide vocabulary of general English words, and also the specialist vocabulary of the particular business activity (trade, transport, distribution, finance, insurance, law, etc.) in which we propose to specialize. (p. 3)

上記のビジネス英語の定義は，国内販売中心の米国（ここでは英語ないし米語というよりは「国語」の方が相応しい）の流れとは異なり，戦前からの貿易の伝統を持つ英国らしい捉え方である。また，non-native users of English である日本で，国際語としての英語のあり方を問題提起してきた論者[6]らの主張とも一致するところである。

後段については，「金融英語の ESP 教育について[7]」主張している論者の立場を裏書きする心強い発言である（Business English 対 General English の論義は，前述の通り暫く置くこととする）。

なお，補足的にある米書[8]からのコメントを紹介しておこう。ただし，これも Business English の特質を述べているが，ビジネス英語の定義にはなっていない。

* Business English is really *standard English.* A dictionary definition that has no usage label (*Obs., Colloq.,* etc.) is considered to be standard. The three words that best describe business English are *clear, concise,* and *grammatical.* The three are equally important.

2 語彙の選定と集約（How to Select and Organize Vocabulary）

語彙論，語用論と大上段に構えなくても英語の中での vocabulary の重要

性は明らかである。そもそも英語にはどの位の語彙があるのであろうか。この点でも前述の *English for Business* が興味ある事実を紹介している。

＊ Many students of business English worry, quite rightly, about their vocabulary. English has 500,000 words in common use and another 500,000 specialist technical words (often called jargon) that are not in the ordinary dictionaries. This compares with an estimated 180,000 words in the German language and 100,000 words only in French.

(p. 5)

日本の『新英語学辞典』[9]では，「*Webster*（第３版）には45万語以上が収められているが，実際に使われているのは10万語程度と推定されている。教養ある一個人の語彙素の数としては６－８万語と推定されている。これは理解語彙（passive vocabulary）であり，表現語彙（active vocabulary）はずっと少なくなる。Shakespeare の全作品中に用いられた異なり語数は約２万語といわれる。」と述べている。

ビジネス用語（the language of business）を検討する前に押さえておかなければいけないのが，一般用語の語彙選定方法である。我々が用語集なり辞書を作る場合に常に問題になるのに対象とすべき用語の範囲をどうすべきかということがある。

ここでは，Cambridge Handbooks for Language Teachers の１冊，*Working with Words*，1986を中心に，問題点を確認しておこう。

(1) Idioms and Collocation

語彙としては語(words)が基本となることは論をまたないが，それだけでは文は成立しない。

ある意味を持った一つながりの語である idioms（熟語，成句，慣用語句）も重要である。なぜなら，イディオムは個々の単語の意味からは全体の意味

をなかなか類推しにくいものだからである。例としては，hang up(電話を切る)，out of the blue（突然，予告なしに）などがある。

言葉と言葉のつながり方を示す collocation（連語関係）も同様に重要である。例えば，The earth *revolves* around the sun.であり，circulate とはあまり言わない。She *bites* her nails.で，eat は使わない。a loud noise（大きな騒音）と a big noise（英口語で大物，顔役）とは意味が全く異なる。*badly* dressed（きちんとした身なりをしていない）や *fully* insured（100%保険付きの）は一組の語句である。これを知らないと適切な表現ができない。

(2) Criteria for Selection

では，用語の選択をどうするか。当然，学習目的によって対象は異なってくるが，一つの基準として考えられるのが frequency（言葉の使用頻度）である。過去の調査としては，

- Micael West (ed.), *A General Service List of English Words*, Longman, 1953

  英語の高使用頻度の2,000語の選定（見出し語は2,000であるが，多語義語の頻度数を含めると6,000弱）の他に，

- The Kucera and Francis list, 1967

  当初2,000語，その後5,000語まで

- J. van Ek, *Threshold Level*, 1975

  約1,500語

- Roland Hindmarsh, *Cambridge English Lexicon*, 1980

  4,500語，語義（semantic value）別では8,000語超。7段階に分類し，1～5段階は Cambridge First Certificate を目標とし，6～7段階は Cambridge Proficiency Examination を目標とする。

(3) その他

用語集の選定基準としては，frequency(使用頻度)以外に，cultural factors(文化的要素)がある。英語母語話者の特定の文化的要素を背景とした言葉を安易に取り込むことは避けるべきであろう。

加えて，技術英語を求める人と観光英語を求める人では，needs and level(要求と水準)が異なることは容易に想像できる。ただし，語学的水準が低くても，商業英語や技術英語を求める人は，高い motivation（動機付け）を持っているので，語彙面では受容能力が高いと言える。

我々がビジネス英語や技術英語の用語集を構築するに当っては，最近の言語コーパスによって得られる知見を活用する必要がある。

ただ，ここではその問題に深入りすることは避けて，本論の目的である最近発行された内外のビジネス英語辞典の vocabulary 面からの比較に向けて議論を進めたい。もちろん，これらの辞典も何等かの基準に則って，words, idioms, collocations を収容している筈である。

その前に，ビジネス用語に関連して ESP (English for Specific Purposes) の研究面のアプローチを確認しておくこととしたい。

3 ESP 面からの考察

ここでは，主に ESP の代表的な研究書である *English for Specific Purposes, A learning-centred approach*, 1987[10]に従って検討する。

本稿のテーマであるビジネス英語やビジネス用語について，ESP ではどのような位置付けをしているだろうか。

(1) ESP の具体的分野

ESP (English for Specific Purposes—具体的な目的のための英語)，簡略

化して言えばSpecial English (SE) の具体的分野としてはどのようなものが挙げられているだろうか。これは，日本でいう「商業英語[注]」との関連でも重要なことである。

(注) 日本商業英語学会は，その英文名称を The Japan Business English Association としている。

前掲書 *English for Specific Purposes* では The tree of ELT (p. 17) で主要3項目とその細目を次のように示している。

* English Language Teaching (ELT)

  …English as a Mother Tongue (EMT), English as a Second Language (ESL), and English as a Foreign Language (EFL)

* English as a Second Language (ESL) and English as a Foreign Language (EFL)

  …General English (GE)…Primary, High School, and Adult

  English for Specific Purposes (ESP)

  English for Science and Technology (EST)

  English for Business and Economics (EBE)

  English for Social Sciences (ESS)

* English for Academic Purposes (EAP) and English for Occupational (Vocational) Purposes (EOP or EVP)

  English for Medical Studies, English for Technicians,

  English for Economics, English for Secretaries,

  English for Psychology, English for Teaching, etc.

Business English 関連では ESP の1分野として English for Business and Economics (EBE)を挙げている。それが EAP と EOP に枝分れし，それぞれ English for Economics と English for Secretaries が例示されている。

English for Business は例示されていないが，EOP (English for Occupational Purposes)の一つとされているものと解釈できる。なお，EOP は EVP

(English for Vocational Purposes)あるいは VESL (Vocational English as a Second Language)とも称される。

(2) ESP 教師に求められる知識

同書 p. 163 では What kind of knowledge is required of the ESP teacher? という設問への答えとして，次のように述べている。

* ESP teachers do not need to learn specialist subject knowledge. They require three things only:
  - i) a positive attitude towards the ESP content;
  - ii) a knowledge of the fundamental principles of the subject area;
  - iii) an awareness of how much they probably already know.

この点で，日本における ESP の最初の唱導者である平田重行教授は「ELT/FLT 研究者が新たに（知的）職業の知識・技術を修得することの時間的，技術的，さらに気分的な困難さ」を指摘されているのは，極めてもっともなことである[11]。しかし，本稿前半で紹介したように，医学英語までを手掛ける一般英語教師が出現しているのは，心強い兆しと言えよう。

(3) 英語教育面の変化

さらに，同書 pp. 165～167では Changes in the status of English teaching と題して幾つかの指摘をしているが，本稿では 2 つの点を紹介しておこう。

* One of the most important features of ESP in relation to General English is that the status of English changes from being a subject in its own right to a service industry for other specialisms. (p. 164)
* In contrast to the General English teacher, the ESP teacher is faced by a group of learners with certain expectations as to the nature, content and achievements of the course. (p. 165)

英国では自らはESP（対象は主に外国人留学生となろう）のニーズに応えることを避けて，職業的な英語ないしはその教師を一段低く見る傾向があるという。また，医学なら医学教師側のESP教師に対する理解も乏しいという。日本でも英語教師は文学の世界に沈潜することを誇りとする傾向がある。一般学生のニーズはそこにないのだが。事実，論者自身ある旧い英語教師が「ビジネス英語は大嫌いだ」と吐き捨てるように言うのを聞いたことがある。

第二の問題点は，GEを教わる学生に対して英語教師は絶対的な権威を持っているが，ESPの場合はそうではないということである。前者は，いわば「赤児の手をひねる」ようなものであるが，後者はもっと歯ごたえがある。外国人留学生は多少の実務経験があるかも知れないし，理系の学生は文系の英語教師より専門知識の点では上回っていよう。また，専門用語も教師の追加負担となろう。

ESP授業の場合，学生数が平均して少ないから，目的が同じでもレベルの違う者が集まる傾向があり，その点GEより教え方が難しい面がある。ある時，論者が社会人向けのセミナーで「国際業務担当者の実務英語」を講じた際，英検1級所得者や米国の銀行で8年間勤務した人などが混じっていて，同時に教えるのに苦労した経験がある。

(4) Vocabularyについて

前掲書ではESPのvocabularyについて明確な議論が見受けられないので，ESPの原典ともいうべきPauline Robinson女史の*ESP (English for Specific Purposes)*, 1980[12]によって，これを検証してみよう。Vocabularyについては，次の2点を挙げてみる。

* Vocabulary is obviously a key issue in ESP and some courses are based exclusively on it. Specialized dictionaries and reference works are clealy of use, especially to translators and those requiring only a reading knowledge of a language.

* Coursebooks, however, especially for in-service students, perhaps do not need to concentrate on the very specialized vocabulary items as students will get these from other sources.

ESP において，vocabulary が重要な要素であることに何等問題ない。論者も「商業英語における用語•用例集の必要性」を指摘したところである（2)を参照)。また，第2項は企業内教育の場合など，専門用語については教師側は余り重視しなくてもいいことを指摘している。これは vocabulary については受講者からの feedback が期待できるからである。

なお，ESP における専門用語の難しさを警戒し，自らが担当することを避けようとする向きには，前掲書 *English for Specific Purposes* (1987)のほうのアドバイス（下記）が参考になろう。

* Vocabulary…We can distinguish four types of vocabulary :

—structural : e. g. are, this, only, however ;

—general : e. g. table, run, dog, road, weather, cause ;

—sub-technical : e. g. engine, spring, valve, acid, budget ;

—technical : auricle, schistosome, fissure, electrophoresis.

It is only the last category that will show any significant variation with subject. But the variation is small.

Inman (1978) found that in an extensive corpus of scientific and technical writing, technical vocabulary accounted only 9% of the total range of lexis. (pp. 165～166)

(注) Inman, M., 'Lexical analysis of scientific and technical prose' in Todd Trimble, M., Trimble, L. and Drobnic, K. (eds.), *English for Specific Purposes : Science and Technology*, Corvallis, Oregon, Oregon State University Press, 1978.

すなわち，vocabulary として sub-technical なのは一般英語の常識範囲内であり，問題となる technical な用語は必ずしも多くない。科学技術英語の場合，その割合は9％程度であるという。

ただし，経済，ビジネス，金融などの場合，同じ単語でも語義面で異なる場合があること，理系・文系を問わず基本的語数はどの位なのか等の問題を残している。これらは次項以降で検討してみよう。

4　ビジネスの用語（The Language of Business）

第1章で「ビジネス英語とは何か」との設問をした上で，次にビジネスの用語を議論すればいいのだが，少し回り道をしてしまった。その理由は何か。それは，各界においてビジネスの用語についての研究が未成熟だからである。

一般的な問題として，ビジネス用語に限らず，対象とすべき語彙の選定と集約をどのような考えの下で行うべきか，過去の経験の上に立って将来の方向を模索するのが常識的な筋道である。その際，General English の茫漠とした世界から一歩出た ESP の知見も生かさなければいけない。

しかし，ESP 研究とは言っても，1970年代後半以降のこの20年間程度の出来事である。ビジネスの分野に生かされている度合もまだまだである。ごく最近具体化して来たコーパス研究も殆ど採り入れられていない。また，ビジネス用語の研究といっても，多くは特殊表現の例証に留まり，包括的な研究はなきに等しいのである。

その中で，ビジネスの用語についてあるべき筋道を説くのは，論者の能力をはるかに超える課題であることは，十分ご理解頂けることだろう。そういった前提の上に立って，以下論者なりの議論を展開して行くことを予めお許し頂きたい。

(1)　ESP 側からの知見

Robinson 女史の *ESP* (1980)では，以下の2点が参考になる。

・Phillips *et al* found in a study of four agriculture textbooks that only about 15% of verbs were specifically associated with agriculture,

whereas 60-70% were 'semi-technical', ie generally applicable to Science, and the remainder were, as they termed them, verbs for the 'organization of knowledge'. (p. 71)

(注) Phillips, M, C Schettlesworth, L Kerr, and S Denny (1974) 'Some linguistic and functional aspects of an English course for students in Agriculture', Paper delivered at the 4th annual seminar of the Association for English in Iran, 14th-17th March 1974. British Council, ETIC archives.

ここでは，ESP における動詞の collocation (連語関係) を指摘していることが注目される。

- Fanning suggests that it is not single words which are always difficult, but phrases, so that common combinations of words should be taught, not just the individual vocabulary items of a discipline. (p. 71)

(注) Review of Brasnett (1969) by P Fanning, in *ESPMENA Bulletin 9*, 1977.

ここでは，単語以上に成句が難しいことが指摘されている。これは用語の組み合わせを固定化し，語義を特定する理系用語の場合はあまり問題にならず，むしろ語義に幅のある文系用語の場合によく当てはまる。

論者の英文翻訳監修の経験では，政治，経済関係文献の中の「形容詞＋名詞」，「名詞の形容詞的用法＋名詞」の場合，専門用語にまで使い方が固まっていない表現での“当てずつぽう訳”が多いことが看取される。これは，その方面の常識が不足しているか，文脈を読み切っていない結果である。

前出の *English for Specific Purposes* (1987)では，EST (English for Science and Technology)系の文例で techical 用語の使用頻度が 9 %にしか過ぎない事例を紹介した。これに続くコメント（以下）が面白い。

- Furthermore, this technical vocabulary was used for less frequently than the non-technical. These technical terms are also likely to pose the least problems for learners : they are often internationally used or

can be worked out from a knowledge of the subject and common word roots. (p. 166)

論者は，予てから International English（この場合，New Englishes でない，名前通りの国際英語）の一分野として ESP の可能性を指摘している（ 7）を参照）が，上記のコメントは特に EST（科学技術英語）の分野での国際英語の可能性を示唆するものである。

なお，国際英語は，English as an International Language あるいは English for International Communication といったほうが誤解の余地がなくて，いいようである。

一般に，ESP というと専門用語を連想しがちであるが，ESP の主眼は学習者のニーズを生かした教育法にあり，用語集のようなプロダクトには関心が薄いように思われる。それもあってか，ESP においては vocabulary の教授法はこれまで余り重視されていないようである。

(2) Vocabulary 研究から

さて，vocabulary に関する研究書は数多いが，今，手元にある 4 冊から参考とすべき事項を見てみよう。

① vacabulary size について

一般には基本語は3,000語程度といわれる（productive vocabulary として）が，このほか数多くの receptive vocabulary がある。外国語として英語を学ぶ者が必要とする語彙はどれ位なのだろうか。

Teaching & Learning Vocabulary (1990)[13]では，word lists の中で最も有名なものとして，Thorndike and Lorge, *The Teacher's Word Book of 30,000 Words* (1944)を挙げている。*Basic English* (Ogden & Richards, 1943) の850語も有名である。その後のものはコンピュータ計算によるものが多い。

大学生のテキストのような academic vocabulary については，*General Service List* (West, 1953)，他がある。しかし，Business English と特定し

たものは見当らないようである。

② コーパスの面から

一般英語では Brown Corpus と LOB が有名であるが，いずれも規模が小さくかつ古い。本格的な英語コーパス活用辞典第1号の COUBULD (1987)は早くも全面改訂版（見出し語7万，1995）が発行され，追っかけて CD-ROM 版ができた。2億語を越すデータベース The Bank of English にはインターネットでアクセス可能となっている。

類書の中では Michael McCarthy, *Vocabulary* (1990)[14] が比較的多くコーパスについて言及しているので，二，三紹介しておこう。

A. Brown Corpus—*The Brown University Standard Corpus of Present-day American English* (1964)

米国出版物からの抽出。総延べ言数約100万語。2巻の本の形で出ている。

B. LOB Corpus—*Lancaster-Oslo/Bergen (LOB) corpus of British English* (1978)

英国出版物からの抽出（Brown Corpus に対応）。総延べ言数は同じく約100万語。

内容はいずれも一般英語と言っていい。

C. COBUILD—*COLLINS Birmingham University International Language Database*（1980年にスタート）

Collins COBUILD English Dictionary の初版（1987年，用例約10万）が出版されるまでに2,000万語のコーパスを作成し，改訂新版（1995年）が出版される時には2億語のデータベースを持つまでに至っており，コーパスの名称を *The Bank of English* と名付けている。

対象は広く一般英語であり，その中にはビジネス用語も含まれている。改訂新版では収録語数7万5,000(4,000の新語を追加)，10万以上の生きた用例を収録している。このデータベースはインターネットなどでアクセス可能と

なっているが，内容そのものは未だブラック・ボックスのままである。

D. *Micro—OCP—The Oxford University Press Coordinating Program, Oxford University Press, 1988*

これは個人がパソコン（*home-computers*）で分析できるソフトとして紹介されている。これを使って *word lists, indexes, and concordances*（用語集）などを作るのである。

OUP（*Oxford University Press*）は，*MicroConcord* とその *Corpus Collection A*（5種類の20万語の newspaper texts），*Corpus Collection B*（5種類の20万語の academic texts）を発行しているので，ビジネスを含めた分野別の用語研究に生かすことができる可能性がある。

(3) ビジネス英語テキストから

英米の代表的なビジネス英語テキスト各1冊からビジネス用語についての見方を確認しておこう。英国の例は，先に挙げた *English for Business* (1993)（5)を参照）であり，米国のものは *Business Communication : Theory and Application* (1993)[15]である。

① *English for Business* (1993), 396 pp.

同書ではビジネス英語学習の主要5課題の2番目として（因に1番目は Reading and comprehension，3番目は Grammar and syntax），Vocabulary (building our database of English words we know and can use correctly) を挙げている（p. 3)。そして，学習者に対して新しく得た知識を記録するために，AからZまでの見出しのついた address books の使用を勧めている（日本の場合はA－Z見出しになっていないのが残念だが)。

さらに，同書では分野別の用語例として，computers, controls over business, insurance, meetings, premises などを挙げているが，ごく僅かな例示に留まっている。また，辞書については，受講者向けのテキストという限界もあろうが，辞書の使い方の解説の域を出ていない。

② *Business Communication : Theory and Application* (1993), 794 pp.

この本は米国のまさに代表的なテキストである。米国の場合この本のように第7版ということは，広く受け入れられて，版を重ねるごとに大幅に改訂され，内容を更新していることを意味する。

同書は類書と異なり，理論的側面をかなり織り込んだ価値ある1冊である。その中で辞書の作成過程に触れて，「辞書を過信するな」と次のように説いている。

> … As helpful as dictionaries are, their use is distorted. In the minds of many, they are the supreme authority. One would think that their makers had superhuman intelligence and the authority to dictate correct word usage. This assumption is far from accurate.
>
> Actually, dictionaries are made by teams of readers (lexicographers) who cover the spectrum of current literature. Primarily, they read the works of the better minds—those who have gained some measure of eminence in their respective fields. As the lexicographers read, they look to see how these people use words, and they record all manner of usages. They compile tens of thousands—perhaps even millions—of usage examples. Usages they find to be abundant they keep ; others they throw out. The remaining words and uses go to make up the dictionary. Obviously, it is a dictionary of usage, not of edict. (p. 71)

同書に限らず，ビジネス英語のテキストでは辞書なり専門用語集を「所与」のものとして受け取り，それらの編纂は専門家の手に委ね，その結果を活用・批判するといった傾向があるようで，テキスト上では参考とすべき意見は余り見当らないのが実情である。

その点では第1章で取り扱ったビジネス英語の研究書である *Teaching Business English* (1994)（3）を参照）のほうが参考になるようである。ただし，ビジネス英語といっても内容，学習者は様々であり，あるテキストを見て早急に結論を出すのは危険である。

(4) 橋本による調査

日本においてもビジネスの用語についての研究は少なからずあると思うが，ここでは論者がまとめたものを紹介するに留めたい。

① 金融用語

論者の専門とする金融用語では，1988年4月16日に「金融英語—The Language of Banking & Finance」を日本商業英語学会関東支部研究会（於　早稲田大学商学部）で発表した際に調べたところでは，J. Ricci, *Elsevier's Banking Dictionary*, 1980（6か国語辞書）では，対象語として，2,451語を挙げていた。その後の改訂・増補を経ても約3,000語どまりである。この辺が，金融の専門用語の標準語数であろう。この6か国語辞典シリーズのElsevier辞典の他分野でも，用語数は3,000語内外であることが多い。

② 『経済英語英和活用辞典』(*A Dictionary of English Usage for Business and Finance*) 日本経済新聞社，1991年刊の小著は見出し語5,257語，用例2万2,765うち例文3,458(公表では用語約5,300語，用例約2万3,000）である。この場合，用語は関連・周辺分野のものも一部含んでいる。同辞典はビジネス・ファイナンスの両分野にまたがっているので，金融の用語数を特定することはできない。

③ その後，1995年4月に刊行に漕ぎつけた『英和金融用語辞典』(*A Glossary of Financial Terms*) ジャパンタイムズ，1995年は用語集であるが，見出し語および本文中用例の中でゴシック体活字で表示したいわゆる準見出し語を合わせて約1万8,000語を収録している。

対象は，金融用語を中心に関連・周辺分野約40をカバーし網羅性を高めた。

④ 一方，ビジネスの文例集として編纂した『英文ビジネスレター文例大辞典』(*A Dictionary of English Business Letter Expressions*) 日本経済新聞社，1995年10月刊行は，英文用例を計1万5,000余り収容している。

その中で「分野別専門用語」として，ビジネス用語が24ジャンルに分けて整理されているが，その語数は1,638語である。

⑤ それでは，金融以外の分野の専門用語はどの位あるのだろうか。第1項の中で，Elsevier 辞典では分野別で3,000語内外の用語数であると述べた。これを ESP (English for Specific Purposes) の用語数と見ることができるだろう。

一方，ESP のビジネス以外の有力分野である EAP (English for Academic Purposes，研究目的のための英語) について見ると，より明確な結果が得られる。論者が1992年の ABC (The Association for Business Communication) 発表[16]の中で紹介した次の事例である。

これは，国際基督大学の教師グループによる研究発表[17]である。コーパス研究によくあるように，10分野の入門テキストの最初の100ページをデータベースとして打ち込み，コーパスを作って，それぞれの分野がどれだけのエントリーがあるかを調べる。目的は reading comprehension と vocabulary control の間の相互作業を見ることにある由だ。多分，同校は英文テキストの使用率が高いのであろう。

では，今の2表を見てもらおう。

第1表からは，分野別で2,000ないし5,000の用語が使われていることが分かる。経済学の例では3,719語で，総頻出回数は，2万4,981ある。ここでは中学レベルの用語とその言尾変化形，(ここには示されていないが) 人名・地名とその派生語，一部外来語，ハイフンでつないだ語と略語はデータベース

Table 1 EAP Voc Corpus, Jr High Voc, and Combined Corpus

	EAP Vocabulary Corpus		Junior High	Combined C.
Subject	Tokens	Entries	Tokens	Tokens
Biology	27343	4108	45936	73279
Chemistry	27137	2222	38835	65972
Mathematics	19040	1458	46626	65666
Physics	27130	2069	56258	83388
Economics	24981	3719	53310	78291
Linguistics	25897	3211	56247	82144
Philosophy	22151	2708	64327	86478
Psychology	31616	4403	60794	92410
Anthropology	26510	5603	47793	74303
Education	23690	4405	53253	76943
Totals	255495		523379	778874

Table 2 Breakdown of EAP Voc Corpus into EAP & Non-EAP (Tokens)

Subjects	EAP Voc Corpus	EAP Voc		Non-EAP Voc	
		No	%	No	%
Biology	27343	19466	71.19	7877	28.81
Chemistry	27136	23391	86.20	3745	13.80
Mathematics	19040	17172	90.19	1868	9.81
Physics	27130	24245	89.37	2885	10.63
Economics	24981	20329	81.38	4652	18.62
Linguistics	25897	20326	78.49	5571	21.51
Philosophy	22151	20089	90.69	2062	9.31
Psychology	31616	25818	81.66	5798	18.34
Anthropology	26510	19439	73.33	7071	26.67
Education	23690	18268	77.11	5422	22.89

から除外されているとのことである。

第2表は，EAP Vocabulary と非 EAP Vocabulary の割合を示しているが，それぞれの入門テキストの中で EAP Vocabulary の比率が70～90％と，非常に高いことを示している。研究者は，この結果は学生が一定の EAP Vocabulary を優先的に学習することの有用性を強調していると説明する。

この調査で，数学の専門用語が1,500ぐらいと少なく，また，物理，化学も少ない。これはちょっと思い付かないかも知れないが，人類学が5,600と最大で，生物学がそれに次いで多いなど，概ね予想される通りの結果であることは，本調査の妥当性を裏付けるものでもあろう。

以上で「ビジネスの用語」の検討を終り，次に最近発刊のビジネス英語辞典の検討に入る。

5　最近のビジネス英語辞典（Business English Dictionaries Recently Published）

最近，英語を輸出産業としている英国から『コリンズ・コウビルド英語辞典』(1987，コンピュータ・データベース編集，改訂新版　1995）を始め，*Longman Active Study Dictionary of English,* New Edition (1991), *Longman Language Activater* (1993), *Cambridge International Dictionary of English* (1995), Business English 関係では *Oxford Basic English Usage* (1984, 1992), *Oxford Dictionary of Business English for Learners of English* (1993),『ロングマン・ビジネス英語実例用法辞典』(1992)，*The Oxford Dictionary for the Business World* (1993)と続々出版されている。英国にはやや遅れをとるが，米国からも時折，専門辞典が刊行されている。

ビジネス関連辞典の主なものと，その特徴，内容は次の通りである（当初の英文発表の表現による)。

① *The Oxford Dictionary for the Business World,* 964 pp., Oxford

University Press, 1993.

* A complete Oxford English dictionary for spelling, meaning, pronunciation, and correct usage
* Business and Finance—A dictionary of business terms and abbreviations
* Lengthy entries covering terms commonly used in business and accounting as well as the commodity, financial, and stockbroking markets

② Allene Tuck, *Oxford Dictionary of Business English for Learners of English,* 491 pp., Oxford University Press, 1993.

* The dictionary provides extensive coverage of items commonly used in accounting, banking, computing, international trade, law, marketing, sales, shipping and the stock exchange.
* Clear explanations of business words and phrases
* Over 5,000 authentic samples

based on the Oxford Corpus and specially chosen to help learners with the written and spoken English needed in real business situations

③ J. H. Adam, *Longman Dictionary of Business English,* Second Edition, 541 pp., Longman, York Press, 1989.

* All the words and phrases listed are defined in simple English, in a restricted vocabulary of about 2000 words, based on Michael West's "A General Service List of English Words."
* over 13,000 entries
* example sentences illustrate the meaning and use of words and phrases in context
* wide-ranging coverage of accounting, advertising, agriculture,

banking, commerce, commodity exchanges, computers, economics, finance, industry, industrial relations, insurance, law, management, public finance, quality control, shipping, stock market, taxation, tourism, and tranport

④ John V. Terry, "Dictionary for Business & Finance," 447 pp., The University of Arkansas Press, 1989.

* The dictionary defines terms from every field of business, including many words and expressions from other fields which have been adapted for special use by the business community.
* We can no longer be content with understanding the jargon of one profession; it is becoming increasingly necessary to become acquainted with terminology from many.

⑤ Jerry M. Rosenberg, "Dictionary of Business and Management," Second Edition, 540 pages, John Wiley & Sons, New York, 1983.

* The definitive reference to the modern business lexicon—now fully updated and expanded to include more than 10,000 entries
* Over 10,000 terms and phrases, more than 40 major business areas, both general and specialized definitions

これらの辞典は不思議なことに「語彙の選定と集約」の過程について何も語っていない。多くは，広い分野をカバーしたとか，十分な用語を集めたと言っているだけである。用語研究の最後のよりどころと期待した辞書においてすらこの有様である。辞書編纂の過程を明らかにすることは辞書の権威を傷つけるという積りなのだろうか。ビジネス辞典に特にこの傾向があるようだ。

実作者の立場から言わせてもらえば，辞書編纂の過程は試行錯誤の連続である。例文集めは長い時間がかかる。そして，vocabulary size はその辞書の用途によって決まる。用語選択が最大の難関であるが，ビジネス辞典は範囲

が一応特化しているだけ一般辞典よりはやりやすい。先行辞典があればそれなりに参考になる。

しかし，語義は幅広いから楽ではない。複合語は「形容詞＋名詞」，「名詞の形容詞的用法＋名詞」の用例がどれだけ熟していて，辞書に収容すべきか否かを判断することが難事である。どこまで集めるかも大問題である。まともに考えていたらノイローゼになる。仕事に終りがない。一定の“割り切り”が必要な所以である。以下，論者の実作例で示そう。

6　橋本編纂の3辞典（Hashimoto's Three Dictionaries）

当初の英文発表の形で示す。

① Mitsunori Hashimoto, "A Dictionary of English Usage for Business and Finance,"（経済英語英和活用辞典）865 pp., Nihon Keizai Shimbun-sha, 1991.

＊ 5,300 essential words, 23,000 examples, a treasury of actual usages of English for economics

＊ Major features

—Over 28,000 essential words and specialist terminologies

—all collected from real scenes in business and finance

—with annotations on important words and field labels on many technical terms

—collocation of words with relating prepositions and modifiers explained

—many business letter expressions included for writing purposes

② Mitsunori Hashimoto and Tatsuo Nobu, "A Glossary of Financial Terms,"（英和金融用語辞典）the glossary part-582 pp. by Hashimoto and the reference part-118 pp. by Nobu, The Japan Times, 1995.

* Japan's first full-scale financial English dictionary covering from fundamental words to new financial products such as derivatives
* 6 major features

—over 18,000 words and phrases composed of headwords and examples

—introduces various definitions for all kinds of financial activities

—covers up-to-date financial hi-tech words including options and swaps

—incorporates a number of notes and explanations as spaces permit

—indicates singular and plural usages of nouns which many are not good at using

—outlines essentials of international finance in the reference part

③ Kohei Takubo and Mitsunori Hashimoto, "A Dictionary of English Business Letter Expressions," (英文ビジネスレター文例大辞典) 1,076 pp., Nihon Keizai Shimbunsha, 1995.

* "Think in Japanese, Express in English" as its motto, this unique Japanese-English, sentence by sentence translation dictionary offers as many as 15,000 English business letter expressions taken from about 2,000 select letters by seasoned writers in the business world in the U. S., the U. K., Japan, etc.
* Major features

—With this volume you can compose, without much difficulty, a practical business letter fitting for any complicated international business communication.

—An overwhelming number of 15,000 English expressions are included, based on actually exchanged letters among the U. S., the

U.K., Japan, etc.

—Expressions are itemized under three levels of large, medium, and small headings, so a reader can surely get access to a desired expression.

—Similar types of expressions are grouped together. Therefore, without relying on stereotyped phrases you may utilize a variety of expressions.

* Composition of the Dictionary

I How to Write Business Letters : 15 Model Letters by Situation

II Text of the Dictionary

Large Heading (10)	Medium Heading (38)
1. Salutation	Notice ; Congratulation/Recognition/Thanking ; Inquiry/Condolence ; Invitation
2. Visit/Talk	Meeting ; Introduction ; Preparation ; Conference/Business Talk
3. Arrangement	Request ; Sending ; Credit Reference ; Employment
4. Transaction	Sales ; Quotation ; Ordering
5. Contract	Performance ; Method of Payment ; Procedure for Payment ; Shipment
6. Negotiation	Bargaining ; Claim
7. Settlement	Confirmation ; Pressing ; Apology
8. Appreciation	To Salutation ; To Visit ; To Arrangement/Attention
9. Set Phrases in Letters	The Opening ; The Body (the first half of the body) ; The Main Part (the second half of the body) ; The Close ; The Ending (incl. Complimentary Close) ;

Modifying Phrases & Clauses; Credit Inquiry; Trade Inquiry; Letter of Introduction; Social Letter

10. Technical Terms　by 25 fields (incl. other)

III　Index by Japanese keywords/phrases

もちろん，日本では戦後，ビジネス英語辞典を含めて有益な実用英語辞典が刊行されている。このことは別の機会に取り扱った。[18] なお，論者編の3辞典をここで論じているのは，自らの責任の持てる範囲でビジネス用語を検討する素材として使ったもので，その点を了承頂きたい。

先に論者は英米ビジネス英語辞典が編纂の過程を明らかにしない点を批判した。上記3辞典では「まえがき」などで，用語選択にも触れて多少の説明を行っているので，その一部を以下に再録しよう。

① 経済英語英和活用辞典

では，この辞典にはどのような特徴があるだろうか。当然のことながら，第一には経済英語を読む人のために，経済の諸分野の基本語・専門語を極力幅広く収録したことである。その数は約5,300語。その点では，本辞典一冊で，大辞典や専門辞典，新語辞典に当たらなくても，たいていの場合に間に合うはずである。

第二の特徴は，本書に収録した，活用辞典の所以である約2万3,000の用例である。その基本をなすものは，編者が以前から収集してきた商業・金融関係の約1万にのぼる用例で，今回これを見直して使用した。業務の場面で実際に使われていたこれらの模範的な文例は，経済関係の文献を読みこなそうとする人の参考になることはもちろん，さらに進んで自らの作文に活用しようとする人に役立てられよう。

編者はこれまで何点かの著述を世に送ってきたが，本書との関わり合いは

最も長く，銀行本部勤務時代に収集した約2,000の文例が始まりである。その後，そのカード化や金融・経済関係の例文採集をさらに進め，業務の合間を縫って，文例約7,000の一応の辞典草稿をまとめた上で，最近数年間は，米大学院受講や大学教員転出準備の過程で，経済学文献や経営関係資料を当たりながら，内容の充実を図ってきた経緯がある。

② 英和金融用語辞典

「辞書の部」の編者である橋本光憲は，都市銀行の一つに30年職を奉じたが，この間，主に外国為替，融資関係業務に従事し，現在は教職にある。これらの経験を踏まえてまとめたものに，日本経済新聞社刊『経済英語英和活用辞典』(*A Dictionary of English Usage for Business and Finance*) がある。同辞典にも金融用語を収録したが，今回は手持ちの資料から合計1万4,300の用例全てを投入するとともに，最近の内外文献を広く渉猟して，データの充実を図った。

・見出し語および本文中用例の中でゴシック体活字で表示したいわゆる準見出し語は合わせて約1万5,000と類書を圧倒している。

・金融用語を中心に，関連・周辺分野約40をカバーし，網羅性を高めた。ただし，解説は金融関係を主とし，他分野の説明は簡略にした。

英文を読み，翻訳する場合に辞書を使っていて困るのが，訳語が少ないことである。

・本書では，見出し語のみならず用例においても，語義を充実させた。

〔例〕 benchmark　水準点　基準　基準指数　基準銘柄　指標銘柄

③ 英文ビジネスレター文例大辞典

本辞典の主な特色として，以下の5点が挙げられます（3以下省略)。

1. 英文用例が計15,000余りと類書の4倍強

この辞典は，発信元がアメリカ，日本，イギリス，オーストラリアなどの

国々からの約2,000通の英文レターから実際の例を１万5,000余り抽出したものです。

従来のビジネスレターは，モデルレターを元にしてパラグラフや例文の一部言い換えの形をとっていて，モデルが多いものでも250～300通，応用文例にしてもその５～10倍というもので，多くても3,000例。また，プログラム作成上の問題もありますが，あるコンピュータのデータで定型文書例約160，用例約3,500，計3,660例であることからも，本辞典の15,000例は他を完全に圧倒しているものといえます。

2．ビジネスの場面設定を３段階に分類

項目を大・中・小項目に分けてありますので，ビジネスレターを作成する際，膨大な資料の中から的確な文例を探す上で大へん便利になっています。

まず，様々なビジネスの流れを大きなカテゴリー（大項目）でとらえ，次に切り口をやや狭めた状況（中項目）に絞り，さらに具体的場面（小項目）で選別してありますので，何度か本辞典を利用していくうちに目的の文章がすぐ見つかるようになります。

なお，『経済英語英和活用辞典』については，別論文（18)参照）の中で，資料収集の過程を２ページに亘って紹介しているが，ここでは省略する。

7　ビジネスとファイナンスの英語（English for Business and Finance）――ビジネス英語辞典の良否比較――

①「ビジネスとファイナンスの英語」とは

「まえがき」でもちょっと触れたが，論者の認識では「経済（economy）＝ビジネス＋ファイナンス」である。

経済活動には，財貨・サービスの生産・販売と，その逆の流れとしての代金清算・金融の両側面がある。実物取引と金融取引と言ってもいい。これが

金融と経済活動との相互関係である。[19] 従って，「ビジネス＋ファイナンス＝経済活動（economic activity）」という図式も成り立つ。

そして，「経済活動＝ビジネス（business）」と包括することができよう。ファイナンスは経済，経済活動の重要な側面ではあるが，広い意味でのビジネスという言葉に含めても差支えないということである。

論者編の『経済英語英和活用辞典』は英文タイトルを *A Dictionary of English Usage for Business and Finance* としている所以である。事実，第5章で挙げた米国の辞典では *Dictionary for Business & Finance* と称するものがあった。要するに，ビジネス英語（Business English）といい，ビジネスとファイナンスの英語（English for Business and Finance）といっても，内容はほぼ同じものを指すのである。

ビジネス英語，ビジネスの用語については，これまで種々な角度から焦点を当てて論じてきた。従って，ビジネス英語の同義語ともいうべき「ビジネスとファイナンスの英語」について議論を繰り返すことはしない。その代りに，ここではビジネスとファイナンスの観点から論者の2辞典と英米5辞典の良否比較という切り口を使って，ビジネス用語のあり方をさらに掘り下げることとしたい。

② 内外の一般英語辞典の比較

本論に入る前に，論者がかつて試みた内外の一般英語辞典の比較[20]に触れておきたい。というのは，ここでも今回と類似の手法を使ったからである。

＊ collocation（連語関係）の用例の豊富さの比較―― discuss を例として

A. 勝俣銓吉郎編『新英和活用大辞典』第2版，研究社，1958年，全1,525ページ。

discuss の修飾語（副詞）の例10，前置詞の例4（about, at, over,with）

B. 編集代表市川繁治郎『新編英和活用大辞典』研究社，1995年，全2,782ページ。

discussの修飾語(副詞)の例29，前置詞の例4 (among, between, over, with)

C. Morton Benson, Evelyn Benson, and Robert Ilson, *The BBI Combinatory Dictionary of English, A Guide to Word Combinations,* John Benjamins Publishing Company, Amsterdam/Philadelphia, 1986，全286ページ。

discuss　前置詞の例1 (with)，文例1

D. *Collins COBUILD English Dictionary*, Harper Collins, 1995，全1,951ページ。

discuss　前置詞の例1 (with)，例文4

＊ 何となく世評の高いBBIにしても，COBUILDにしても，Collocationの例示の面では，日本の『英和活用』にはるかに劣っていることが分かる。

＊ 勝俣の旧『英和活用』はdiscuss aboutを採るというミスを犯しているが，初版は戦前の1941年(全1,938ページ)であり，今さらながら勝俣の偉大さが評価されるのである。

③ ビジネス英語辞典の良否比較

比較の対象を，下記(A)〜(G)の7辞典とした。これで，日・英・米の最近の主なビジネス英語辞典をカバーした積りである。(A)，(B)は橋本編，(C)，(D)，(E)は英国系，(F)，(G)は米国版である。そして，用例としては，businessとfinanceに関連する表現とした。ビジネスとファイナンスの英語を対象とする以上，この2つの用語の選択は公平なものと言えるだろう。

(A) M. Hashimoto　*A Dictionary of English Usage for Business and Finance*

(B) M. Hashimoto　*A Glossary of Financial Terms*

(C) —　*The Oxford Dictionary for the Business World*

(D) Allene Tuck　*Oxford Dictionary of Business English for Learners of English*

(E) J. H. Adam　*Longman Dictionary of Business English*

(F) J. V. Terry　*Dictionary of Business & Finance*

(G) J. M. Rosenberg　*Dictionary of Business and Management* (cf. *Dictionary of Banking & Financial Services*)

具体的な方法としては，論者編の(A)『経済英語英和活用辞典』の business 関連表現を中心に，他の辞典での採用の有無と，逆に(A)に出ていない事例を個々に抽出する。一方，finance 関連表現では，論者編の(B)『英和金融用語辞典』を中心に置き，他の辞典について同様の比較を行うものである。

BUSINESS (A)	(C)	(D)	(E)	(F)	(G)	(B)
『経済英語英和活用辞典』						『英和金融用語辞典』
a business address						a banking business
勤務先の住所						銀行業
a business agent		A	A/B		A	a big business
商売上の代理権者						巨大企業
a business call						business ability
商売上の訪問						企業運営能力
a business card		A	A			business adjustment
業務用名刺						景気調整
a business center			B			business barometers
商業の中心地						景気指標
business checks						buniness behavior
業務用小切手						企業動向
business class						business capacity
[飛行機]ビジネス・クラス						取引能力
business connections						business checks
取り引き関係						業務用小切手
business correspondence						business combination
商業通信						企業結合
business credit					A	business credit
企業金融						企業金融
a business cycle	A		A	A	A	a business cycle
景気循環						景気循環

a business day			A	A	
営業日					
a business department					
営業部					
business equipment					
事務機器					
business ethics					
商業倫理					
business failures					
企業倒産件数					
a business friend					
得意先					
business hours		A			
営業時間					
business letters					
商業文					
a business lunch		A			
仕事の打ち合わせを兼ねた昼食					
a business manager			A		
営業支配人					
a business organization					
営業組織[会社]					
business papers					
商業手形					
business premises	B		A/B	B	
営業所					
a business reply card	A		A		
返信用はがき					
a business reply envelope					
返信用封筒					
business reply mail					
返信用郵便					
a business school		A			
経営大学院					
business solvency					
事業の支払い能力					
business status[standing]					
営業状態					
business terms					
取り引き条件					
a business transaction					
商売上の取り引き					
a business trip		A			
業務出張					

		a business day
		営業日
		business deposits
		営業預金
		business development
		渉外業務
	A	business environment
		事業環境
		business failures
		企業倒産(件数)
		business finance
		企業金融
		business fluctuation
		景気変動
		business forecast(ing)
		景気予測
		business funds
		事業資金
	A	business[office]hours
		営業時間
		business indicators
		景気指標
		business insurance
		事業保険
	B	business interruption
		事業中断
		business inventories
		営業在庫
		business license
		営業免許
		business liquidity
		企業の手元流動性
		business loans
		事業金融
		a business manager
		営業支配人
		business of dealers
		自己売買業務
		business papers
		商業手形
		business premises
		営業所
		business profit
		営業利益

a business year 営業年度						business reports 営業報告書 business status[standing] 営業状態 business tie-up (contract) 業務提携 a business year 営業年度 a line of business 営業種目
(計　34…business の形容詞的用法の用例のみを示した。)	(計)	3	6	10	3	6	(計　38)

[注]1. (A), (B)のアンダーラインは，(A), (B)共通の表現を示す。

2. (C)〜(G)欄のAの表示は，(A)欄の表現が，Bの表示は(B)欄の表現がそれぞれに収録されていることを示す。

3. (E)欄でA/Bとあるのは，(A), (B)左右の表現が(E)に収録されていることを示す。

その他の表現

(A) 一緒に使う verb 57, business の adj. 22, 用例 sentence (full) 20, 〜(part) 9, phrases 22, business＋noun/adj.＋business 計 13, prep.＋business/business＋prep., etc. 計 3 合計146，総計180

(B) 0，すなわち(B)の下に示した計38の表現が，(B)に収録された表現の全てである。従って上記の表では，一見(B)の表現が(A)より多いように思われるが，(A)のその他の用例を加えると(A)の方が圧倒的に多いことが分かる。

なお，(A)では business の別項に，a big business, business connection(s), business indicators の3つも含んでいる。

(C) 〜judgement, marketing research, name, plan, software package 計5，表と合計で8。

(D) 〜meeting, plan, sense, studies, 用例 verb 1(do), prep.＋business 8 計13，表と合計で19。

(E) 〜economics, economist, entity concept, expansion, game, law, strategy, 用例 sentence (full) 12, 〜(part) 3，計22，表と合計で32。

(F) 〜risk, transfer payment 計2，表と合計で5。

(G) ～data processing, expenses, game, logistics, trust　計5，表と合計で11。

［総評］

ビジネス英語辞典としては最大ページ数 (964 pp.) の *The Oxford Dictionary for the Business World* にしてからが表現例が僅かに8で，用語解説が主になっている。*Oxford Dictionary of Business English for Learners of English* は題名からして外国人向けなのに表現例が19に過ぎず，これでは "for Learners of English"の名前が泣きそうだ。*Longman Dictionary of Business English* は，ビジネス英語辞典として定評があるが，それでも表現例は32しかない。米国の2辞典に至っては，僅かに5と11。

自画自賛になってしまうが，論者の『経済英語英和活用辞典』は表現例が180，用語辞典という限界を持っている『英和金融用語辞典』にしても38はある。「いったい，英米のビジネス英語辞典はどんな方法で用語，用例を集めているのだ」と文句の一つも言いたくなるところである。

なお，(A)，(B)両辞典の表現例には和訳を付してみたが，ご覧になって辞書として「これはいらない」というより，「これはあったほうがいい」という事例のほうがずっと多いことをご理解頂けるだろう。とすれば，英米の同種辞典が外国人が求めているような表現事例が少な過ぎるという論者の意見は正しいことになるわけである。

では，専門用語として特化していると考えられる finance［名詞］のほうはどうだろうか。

FINANCE (noun)						
(B)	(C)	(D)	(E)	(F)	(G)	(A)
『英和金融用語辞典』						『経済英語英和活用辞典』
bridging finance						bridging finance
つなぎ金融						つなぎ金融
corporate finance						finance capital
法人金融						金融資本

finance bills			B	B	A	B*/A*	the finance charge
[米]融通手形							金融諸掛り
finance capital							finance companies
金融資本							[corporations, houses]
finance companies				B		B	金融会社
[corporations, houses]		B	B	B			corporate finance
金融会社							法人金融
finance engineering							finance function
金融技術							財務職能
finance for agriculture							high finance
農業金融							大型金融
finance[financial]lease						B*	internal finance
ファイナンス・リース							内部金融
the Finance Ministry							local authority finance
大蔵省							現地当局金融
Finance Ministry notes							public fiance
大蔵省証券							財　政
finance paper							
金融手形							
high finance							
大型金融							
internal finance							
内部金融							
public finance				B			
財　政							
(計　14)	(計)	1	2	4	1	4	(計　10)

* from *Dictionary of Banking & Financial Services* by the same author

その他の表現

(A)　verb　1 (get) 計1，表と合計で11。

(B)　0，計14。

(C)　0，計1。

(D)　0，計2。

(E)　～market, rate, 用例　sentence 1, phrase 1, adj. 3 (business, company, private)　計7，表と合計で11。

(F)　0，計1。

(G)　*～ and control, capitalism, unit　計3，表と合計で7。

［総評］

論者の(A)，(B)辞典では表現例がそれぞれ11と14。(C)，(D)は僅かに１と２。*Longman Dictionary of Business English* は，さすがに11。その中に５の用例を含んでいる。(F)は“Business & Finance”の名に反して，たったの１つ。(G)は同一著者の Finance に特化した別の辞書を入れて公平を期した結果が，合計７。

Finance でなく，financial を選んだほうが実態がよりよく浮び上がったかも知れない。また，論者の『英和金融用語辞典』が「用語」辞典に留まっている限界かも知れない。いずれにしても，論者の２辞典が互角以上の戦いをしていることは間違いない。

お　わ　り　に

さて，ビジネス用語の有様を求めて航路の定まらない旅に出た思いをした論者の小型船も，途中幾つかの灯台の光に助けられて，何とか元の港に戻ることができた。

でも，ビジネスの用語を研究する方法論を模索する過程では，先達の助けを探しあぐね，方向感覚を失いそうになった。それを何とか切り抜けられたのは，論者の辞典実作者としての経験から得られた「カン」によるところが大きいような気がする。

そんな堂々巡りの旅の収穫は何だったのだろうか。最後はやや我田引水的な議論になってしまったが，「ビジネス用語の追求のためには，できるだけ多くの用例を集めなければならない」という論者の信念が裏付けされたことであったろうか。

外国人だからといって英語の世界に貢献できないということはない。現に，デンマークの Otto Jespersen は英文法の大学者であった。日本人が作った英語辞書も，いいものはいいのである。論者自身としては，まだ行く手は

遠いが，これからも前進するしかあるまいと思うのである。

注

1) English for Special Purposes *n* 特殊な目的のための英語；English for Specific Puroses；（略）ESP

コースの内容と目的が，特定の学習者集団の特別な必要性によって定められている言語コースや教育プログラムにおける英語の役割。たとえば，研究目的のための英語（English for Academic Purposes），科学技術のための英語（English for Science and Technology），看護婦のための英語などのコースがある。このようなコースは，一般的な言語能力を教えることを目的にしたコース（一般的な目的のための英語 English for General Purposes）と対比される。

⇨ LANGUAGES FOR SPECIAL PURPOSES

〈参考文献：Robinson 1980〉

『ロングマン応用言語学用語辞典』南雲堂，1988年。

これと同様の事例に，Varieties of English—New Englishes を「英語の変種」と訳す問題がある。variety は一般には種類であり，変種というと生物学用語になる。同じ使うなら新種のほうがいい。言理学のほうでどう言おうと，「各種の英語」あるいは「様々な英語」ぐらいでいいのではなかろうか。native varieties of English と non-native varieties of English という分け方もあるぐらいなのだから。

2) 橋本光憲「商業英語を学問として高めるために—商業英語の用語・用例集編纂の経験を踏まえて」『研究年報』第53号（1993），日本商業英語学会，1994年。

3) Mark Ellis & Christine Johnson, *Teaching Business English,* Oxford University Press, Oxford, 1994.

4) 引地岳雄「英語医学論文と英語教師」『実用英語ジャーナル』日本実用英語学会，1995年9月23日。

5) David Whitehead & Geoffrey Whitehead, *English for Business,* Butterworth-Heinemann, Oxford, 1993.

6) 橋本光憲「コミュニケーションのための英語—非『英語母語』国民の観点か

ら—」『国際経営論集』第4号，神奈川大学経営学部，1993年1月。

7) 同上，「Business English から Special English へ—金融英語の ESP 教育について—」『研究年報』第51号（1991），日本商業英語学会，1992年。

8) Robert E. Barry, *Business English for the '90s,* Second Edition, Regents/Prentice-Hall, New Jersey, 1993, x.

9) 『新英語学辞典』研究社，1982年。

10) Tom Hutchinson and Alan Waters, *English for Specific Purposes, A learning-centred approach,* New Directions in Language Teaching, Cambridge University Press, 1987.

11) 平田重行「ESP への対応をめぐって」『大阪商業大学論集』1988年10月。

12) Pauline Robinson, *ESP (English for Specific Purposes),* Pergamon Institute of English (Oxford), 1980.

13) I. S. P. Nation, *Teaching & Learning Vocabulary,* Heinle & Heinle (U. S. A.), 1990.

14) Michael McCarthy, *Vocabulary,* Oxford University Press, 1990.

15) Raymond V. Lesikar, John D. Pettit, Jr., Nancy S. Darsy, *Business Communication : Theory and Application,* Seventh Edition, Dame Publications, Houston, 1993.

16) Mitsunori Hashimoto, "English for Specific Purposes (ESP) and the Teaching of Financial English,"『神奈川大学言語研究』第16号，神奈川大学言語研究センター，1994年3月。

17) ICU ELP Research Group, "A Proposal for the Establishment of an EAP Vocabulary List and an Analysis of Its Appropriateness, *JACET* (The Japan Association of College English Teachers) Bulletin, 1992.

18) 橋本光憲「戦後における実用英語辞典の発展—ユーザーとして制作者として—」神奈川大学経営学部『国際経営論集』第10号，1996年2月。

19) 同上「銀行経営と内部管理—銀行経営論の新領域を提唱する—」神奈川大学経営学部『国際経営論集』第11号，1996年9月。

20) 前記 18) pp. 109～117。

主要参考文献

(1) 橋本光憲編『経済英語英和活用辞典』日本経済新聞社，1991年。

(2) 橋本光憲・信達郎編『英和金融用語辞典』ジャパンタイムズ，1995年。
(3) 田久保浩平・橋本光憲編『英文ビジネスレター文例大辞典』日本経済新聞社，1995年。
(4) J. H. Adam, *Longman Dictionary of Business English,* York Press, Beirut, 1989.
(5) *The Oxford Dictionary for the Business World,* Oxford University Press, Oxford, 1993.
(6) Allene Tuck, *Oxford Dictionary of Business English for Learners of English,* Oxford University Press, Oxford, 1993.
(7) *Collins COBUILD English Dictionary,* Harper Collins, 1995.
(8) John V. Terry, *Dictionary for Business & Finance,* The University of Arkansas Press, 1989.
(9) Jerry M. Rosenberg, *Dictionary of Business and Management,* Second Edition, John Wiley & Sons, New York, 1983.